

# 鏡の世界で人探し

大根大佐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西住家に人生を変えてもらった杉山慎一。行方不明になった西住みほを見つげるため探し続けていた。そんな中、慎一は己の願いを叶えるために命をかけて戦うライダーバトルに巻き込まれていくー

基本オリジナル展開でやっていくつもりではありません。一応ガルパンと仮面ライダー龍騎のクロスオーバーとなっていますが2：8くらいの割合です。ガルパンのキャラも時々出したいとは思っています。

龍騎の方は原作キャラは出すつもりもなく、設定もこちらで変えさせていただきます。

あまり時間が取れないため、更新は遅れることが予想されます。

目次

1 話	1
2 話	4
3 話	7
4 話	9
5 話	12
6 話	17
7 話	19
8 話	24
9 話	27
10 話	29
11 話	32
仮面の裏側 side 杉山慎一	35
12 話	38
仮面の裏側 side 南藤駿介	41
13 話	43

## 1話

スマホのアラーム音で起こされる。いや、着信音だった。

「はい…もしもし」

「今起きたばかりか、相変わらずだな。」

「ああ、まほちゃんか。おはよう…」

まだ寝ぼけているけど無理やりベッドから出る。

「全く、もつとまともな生活しろよ…」

「ごもつともです…」

しばらく沈黙が続く

「なあ、慎一…まだみほを探しているのか？ 大学を休んで…」

「…うん、探しているよ。みほが見つかるまで探し続けるよ、俺は。」

「そうか…お前はなんでそこまでしてくれるんだ？ お母様に仕えているからか？」

「それだけじゃない」

「俺は…西住家に、返せないほどの恩があるからな」

西住みほが消えたー

第63回戦車道全国高校生大会を優勝し、エキシビジョンマッチを来週に控えた日、みほはどこにいいのかわからなくなった。しほさ…いや家元はみほの行方は全て警察に任せ、自分では動かなかった。それでも母親として心配しているみたいで、ご飯もろくに食わず、寝ていない。警察は半ば諦めたようで近々捜査打ち切りになるかもしれないそうだ。警察署に勤めている友達の竹賀谷健斗から話を聞く限りだと最近、多発している連続失踪事件の被害者の1人として処理さ

れるらしい。

「そうか…」

『俺1人じゃどうすることもできない。上層部はこのことを西住流家元に報告すると言ってた』

「ありがとな、わざわざ。あれから1年たったんだ、当たり前だよ」

口ではそう言っているが正直満足していない。

『…』

「どうした健斗？」

『…今から会えるか？なるべく早く』

「わかった…。でもなんでだ？」

『お前に見せたいものがある…』

「悪い、待たせたな」

「別にいいよ、俺こそごめん…大学があるのに」

「…俺、大学休んでみほを捜しているんだ。だから大丈夫」

「…これを見せてくれ。これは合成でもCGでもない。現実だ」

そう言っただけ健斗はパソコンであるビデオを見せてきた。エレベーターの中の監視カメラで撮れたやつだそう。日付は半年前。

「ここからだ…」

健斗が呟くのが聞こえた。

映像では男の人が1人いるだけだった。すると、壁に貼り付けてある鏡が揺らめく。次の瞬間、蜘蛛の足のようなものが伸び男の人は鏡に引きずり込まれた。一瞬のことだった。

「これは…」

一体何？この言葉が出てこなかった。後ろを振り向く。誰もこちらを見ていないのに見られている気がする。まさか…さっきの…

「あれが今回の連鎖失踪事件の真実だ」

「上の人は何て言ってるんだ？」

「このビデオを渡したら返されなかった。忘れろ、だとさ」

健斗はため息混じりで言い放った。

「じゃあなんでお前持ってるんだ？」

「渡す前にこれだけコピーしていたんだ。ほんとはダメだけどね」

「こいつ…それにしても、上の人が忘れろっていうほどのものなのか…」

「いや、単純にこのビデオを公開したり、さっきの化け物のことを話して、町の人たちがパニックになるのを防ぐためだろ」

健斗と会話してふと気づく。

「なあ、これって半年前だろ？ 今までの連続失踪事件もこの化け物がやったのか？」

「いや、違う。他の監視カメラの映像を見る限りだと他にもいるみたいだ。全く恐ろしいよ。いや何が恐ろしいかって言うと、鏡だけじゃなくて反射するものならなんでもいいらしい…例えば、窓」

少しドキッとして窓を見る。反射した俺の顔が映っている。

「とにかく気を付けろ。お前も生き残りたいなら関わらないほうがいい…」

「ああ、気をつける…」

そして健斗は仕事に戻り、俺は帰った。あのビデオを見てからずっと考えていた。みほもあいつらにやられたのかもしれない…こうなると一刻も早く探し出さなくちゃいけない。そういえばこの前、大洗女子学園の生徒会長だった人からみほと特に仲が良かった人がいる事を聞いた。その人は今でも…

「行くか…大洗に…」

そうしないと何も始まらないと思った。

## 2話

大洗は変わったー

全国大会で優勝した後のあの町は活気にあふれていた。ただ、今のこの町には活気はなくてシャツターを閉めているお店が増えていた。

「そんな…」

町を歩いている人も見かけない。大洗女子学園が廃校になったからなのか？

「とりあえず、行こう…」

廃れた町の中を歩いていく。

ピンポーン

ガチャ

「はいー！」

なんか元気のいい娘が出てきた。

「杉山慎一といいます。武部沙織さんはいますか？」

「あ、お姉ちゃんですね。ちよつと呼んできます」

お姉ちゃんと呼びながら戻っていった。

「おい、あんた…」

ドアが開いたと思ったら別の人がいた。

眠そうな顔をして髪もボサボサ。おまけに体のサイズに合っていない服を着ていてだらしない。

「あなたが武部沙織さんですか？」

そう聞くと、嫌そうな顔をした。

「違う、沙織は私の親友だ」

「もしかして、冷泉麻子さんですか？」

「ああ、だがなんであんたが私や沙織の名前を知っているんだ？」

こつちを警戒しているのは見ればすぐわかる事だった。

「それは…」「すいません、あの…」

するとドアからもう1人の女の子が出てきた。そうか、この娘か…

「あなたが？」

「私が武部沙織です…」

家にあがらせてもらえた。沙織さんの妹、詩織さんはとても元気で色々話しかけてくる。そして1つのテーブルを囲んで対面する。

「まず、あんたは何で私達のことを知ってるんだ？」

まだ警戒してるようだ。

「俺は西住みほを探している。この間、角谷元会長に話を聞いて教えてもらった」

「何で西住さんを捜している？」

「俺は西住邸に住み込みで家政婦の菊代さんと一緒に家事全般をしていた。中学生の頃からしているから、みほやまほちゃんとは長い付き合いなんだ。だから、みほを探し出さなきゃいけないんだ」

「お前の親はどうした？住み込みだって許しているのか？」

さつきつから冷泉さんとしか話してない…

「…俺の両親は、俺が小学6年生の卒業式の日に交通事故でしんだ。しほさんと母さんは仲が良かったから、俺は西住邸に住まわせてもらったんだ。中、高、それに大学までお金を出させてしまった。大切な家族を失ったけど、新しい家族の一員とになれた。もうこれ以上大切なものを、大切なことからものを失いたくないんだ」

ここまで話して顔を上げると冷泉さんは暗い顔をしていた。

「…麻子もね、小学生の時に両親を亡くしているの。最後の家族のお婆ちゃんも今入院しているし…だから杉山さんの気持ちかわかるんじゃないのかな。大切なものを失いたくない、って気持ちがある」

そうだったのか…冷泉さんも家族を亡くしていたのか。

「で？杉山さんはみほりんの何を知りたいんですか？」

「みほに変わったこととかありませんでしたか？いなくなった前の時とか」

「うーん、そういえばお泊まり会をした時に気になったんだけど鏡がなくなっていたかな。前まではお風呂に掛かっていたのに」



鏡。その言葉を聞いて健斗が見せてくれた映像を思い出す。もしかして、みほはあの化け物の事を知っていたのか？

「あと、西住さんはカードデッキみたいなのを持っていたな…西住さんが落とした時に拾ったら、凄い勢いで取られた。いつもの西住さんとは思えなかったな」

カードデッキ…何か関係があるのか？

「ありがとうございます。武部さん、冷泉さん」

「頑張ってくださいね、杉山さん」

「はい。あの、武部さんも頑張ってください。あなたは一人じゃないんだから。親友の冷泉さん、元気な妹さんたちがいるんだから。まだどうにでもなりますよ」

「…はい、私も頑張ります」

別の高校に転校せず実家に帰っていた武部さんは少し元気になったように見えた。

鏡、カードデッキ…正直関連性がない。一体何があったのだろうか…

武部さんの家で夕食をご馳走になってから帰った。

玄関を開け、リビングに入った時に目に入ってきたのはカードデッキだったー

### 3話

ひとまず今日までのことを振り返るー

昨日の朝、まほちゃん電話してその後健斗と会ってビデオを見て、

その次の日に大洗に来て武部さんや冷泉さんからみほのことを聞いて、今家に帰ってきたー

振り返ってもわからない。うちの合鍵なんて誰にも渡してないから、この家の中に入ることは出来ない。じゃあどうやって、誰が、なんの目的で俺の家の机の上にカードデッキを置いていったんだ？そう考えながらカードデッキを手に取ると頭の中に甲高い音が響き頭痛がする。思わず呻きながら壁に寄りかかってしまう。急に謎の音も止み頭痛が止んだ。あれは何だったんだと思いつながら頭を上げた時に知らないし見たこともない男の人がいた。正確には窓ガラスに反射している姿を見ているだけだった。しかし、振り返っても誰もいない。でも窓ガラスには姿が写っている。暗い肌色で丈が膝くらいまであるコートを羽織り、ボサボサの髪で少し隠れている目から強い視線を感じる。

「あんた…だれなんだ」

「そのカードデッキを使って戦え。そうすれば願いは叶う…」

これの事を言っているのか？カードデッキを見つめる。何か強い力を秘めている…：ような気がした。

「12人のライダーを倒して、最後の1人まで生き残ることが出来れば、お前は願いを叶えることが出来る」

願い。俺の…願い。

「お前は…一体何者なんだ？」

そう質問した時にはあの不思議な男はいなくなっていたー

昨夜はあの男の言葉が頭に残り、まともに寝れなかった。そのせいで頭が痛い。耳鳴りもする。健斗から教えてもらった連続失踪事件

の被害者である男性の家を訪れた。失踪する少し前からおかしくなっていたと、周りの住人は言ってるらしい。

「何だよ……これ……」

ベランダの窓、テレビの画面、ありとあらゆる”姿を反射するもの”に新聞や紙を貼り付けてあった。もしかして、みほはあの化け物に狙われていたのか？だからこんな事をしたのか？そんな推測をしているとまたあの甲高い音が頭に響いた。ベランダに出て外の空気を吸おう、と思つて外に出る。すぐ近くには全面ガラス張りのビルがあった。そのガラスが…揺れた。その中から赤い龍が飛び出してきた。

「うわー！」

とつきに腕で守ろうとするがどう考えても無理だ。ただ何もしないで死ぬのは嫌だ！喰われると思つたが龍は引き返して行った。

「なんだつたんだよ……」

部屋から急いで逃げた。とりあえずここから離れたかった。しばらく歩く歩いていると、また頭に音が響く。ふと目に停車してある車が入った。そこには巨大な蜘蛛が映っていた。その蜘蛛はゆつくりと近づいてきた。思わず後ずさりする。だんだんと近づいてくる蜘蛛、そして俺の意識はブラックアウトしたー

## 4話

気がついたら鏡で覆われている空間を飛んでいた。あまりの驚きで思わずジタバタ暴れた…が、特に意味もなくただ飛んでいた。そしてとうとう終わりが見えてきたー

「おわっ!!」

思いつきり地面に放り投げられ尻もちをついた。そして今、自分がいるところが自分の知っている”世界”じゃない事に気がついた。また、自分に起きた”異変”に気がついた。アーマーのようなものを身にまとっていた。

「なんだこれ!?!」

すると目の前にさつき見た蜘蛛の化け物が迫ってきた。急いでその場を離れるようにして走り出した。追いつかれ巨大な脚で高く吹き飛ばされた。ビルの壁に掛かっている看板にぶつかりながら地面に衝突した。すると、どこから現れたのか奇妙なバイク?が現れ蜘蛛に突っ込んだ。そのバイクから降りてきたのは紺色の騎士だった。

「大丈夫か?・モンスターとも契約してないのに戦おうとするなんて、お前は馬鹿か」

そう言った直後、蜘蛛は起き上がり紺色の人に敵意を剥き出していた。騎士はベルトに装着してあるカードデッキからカードを1枚抜き、バイザーで読み込む。

《ソードベント》

そして空高くから1本のランスが落ちてきた。それを手に蜘蛛と対峙する騎士を見て真似してみた。自分でも戦ってあの蜘蛛を倒す!

《ソードベント》

落ちてきた剣を構え、走り出す!

「だあー!!」

蜘蛛に斬りつけようとしたが、巨大な前脚で剣が…折られた。

「折れた!?!」

驚きで身体が硬直し、その隙に前脚で吹っ飛ばされた。そして吹っ飛ばされた先で騎士に弾かれた。

「邪魔するな！」

痛みでうずくまっているのに罵声を浴びせられた。こんなことつてある…

《アドベント》

騎士は新たにカードをよみこんだ。すると新たに巨大なコウモリが飛んできて、蜘蛛の前脚を折った。

《ファイナルベント》

騎士は蜘蛛に向かつて走りだし、コウモリもその後を追い、騎士の背中にくつついた。騎士はそのまま空高く飛び上がり回転しながら蜘蛛を貫いた。大爆散した蜘蛛を眺めていると光る球体が現れたがコウモリが食べてしまった。驚く要素が多すぎて頭の中が真っ白になっていた。

「おい、あんた！さっきのなんなんだよ！あの蜘蛛なんなんだよ！コウモリはお前の仲間なのか!?契約ってなんのことだよ!?説明してくれよ!!」

気になっていたことを思いつきり聞いた。それでも聞きたいことがどんどん増えてくる。

「はしゃぐな!!」

怒られた。俺は悪いことをしたのか？すると近くに駐車してあった車が爆発した。あたりを見回すと原因は空から降ってくる炎の玉だった。ただ、降ってくるのではなく”吐いて”いるものだった。空から赤い龍が降りてきていたのだ。あれも仲間なのか？と思いきり騎士の方を見たがもう騎士は逃げていた。

「待ってくれよ！おい！」

立ち止まってはくれず、逃げていたので後を追う形で俺も逃げた。急に騎士はビルの窓ガラスの前で立ち止まり、ガラスの中に入ってしまった。そうすればいいのか！マネをしたが窓ガラスにぶつかっただけだった。すると”向こう側”から自分が入ったところから出ると、言われた。自分が入ったところ…俺が思いつくのは1つしかない

かった。

目的地まで全力で走る。その間も龍は攻撃を続ける。それをなんとかくぐり抜け、ある車の窓ガラスに飛び込む。断片的な記憶の中で見つけた希望にかけて飛び込んだ。そして俺は窓ガラスの中に入ることができて現実世界に戻ることができたが直ぐにまた、意識を失った。本日2度目だった。

## 5話

目がさめると薄汚れている天井が目に入った。ほんのりと珈琲の香りがした。俺は知らない家の知らないベッドで眠っていたのだ。確か、蜘蛛に襲われて、紺色騎士が出てきて、その騎士が蜘蛛を倒した後に今度は赤い龍が襲ってきて、俺はなんとか無事に帰れた。で？それから何があったのか全く覚えてない。

「お前は気を失ったんだ。ミラーワールドから出るとすぐにな」

そう言いながら、マグカップを両手に持った男が俺に近寄ってきた。そしてカップを1つ渡してくる。

「あんたが助けてくれたのか？」

コーヒーを飲みながら聞いても答えてくれなかった。ただその男の人もコーヒーを飲んで砂糖を足したりするだけだった。

「これはお前のデツキか？」

そう言っただけで俺が持っていたカードデツキを渡してきた。

「あつ！俺のやつ！」

「そうか、やっぱりあのライダーはお前だったか」

そう言うと男の人はまたコーヒーを飲む。俺も飲みながら考える。

そしてある1つの考えを口にした。

「あんた、あの紺色の騎士か？」

「ああ、あれは俺だ」

「そうだったのか？ありがとう、助けてくれて。俺は杉山慎一。あなたの名前は？」

「…小林蓮」

「蓮、あの化け物はなんなんだ？」

蓮はカップを置いて俺の方を向いた。

「俺はモンスターと呼んでいるやつか。あのミラーワールドの中に生息していて人間を捕食しないと生きていけないんだ」

「そうか？…そういうえばカードデツキを渡してくれた男はなんなんだ？

どうしてこんなことを…」

「俺にもわからん」

カップを持ち、キッチンへ行ってしまった。

「ただわかること、と言うか直感的にわかるのは親切でこんなことをしているわけじゃないということだ」

蓮と話してどれくらい経ったかわからない。俺は蓮の家——一階のカフェに住み込みでアルバイトしているらしい——から出て自分の家へ帰っていた。家に到着してすぐにベッドに飛び込んだ。あの化け物ー蓮はモンスターと呼んでいたーのこと、ライダーのこと、そしてミラーワールドと呼ばれる鏡の世界。さっきまでのことが頭の中を駆け巡り、目眩がしてくる。

「ねえ、あなた！」

女性の声があった。でも今この家の中には自分しかない…とうとう幻聴まで聞こえるようになったのか。

「ねえってばーこっちの窓ガラスを見てよ!!」

頭が働かず、言われるがままに窓ガラスを見る。さっきまでぼーっとしていた頭が一瞬にして覚めた。昨日見た男の時と同じように窓ガラスにしか映ってなかった。

「あなたもライダーだよね？あなたにお兄ちゃんを止めて欲しいの」

「あなたのお兄ちゃんなんか俺は知らない…ん？もしかしてもしかして、これを渡してきた人か？」

すると、急に女性は暗い顔をした。

「そうお兄ちゃん…名前はシロウ。お兄ちゃんも私と同じようにミラーワールドに囚われているの。多少は外に出られるけどだいたい10分くらいしかいられない…」

「囚われているってどういうこと？」

「…私は8歳の頃に死んだの。その時に鏡の世界の“私”だけが残っちゃったの。お兄ちゃんは私を生き返らせる方法を探しているうちにミラーワールドをしっただんだと思う…」

…ここまで聞いてふと疑問が出てきた。

「待ってくれ、君はなんで俺にそんなことを教えてくれるんだ？」



「あなたならお兄ちゃんを倒せると思うの。私は他人を犠牲に生ま  
で生き返りたくない。私の望みはお兄ちゃんを止めることなの」

「そういえば君の名前は？俺は杉山慎一」

少しかしまったように名乗った。

「ユイ。あなたの他にもこの事を話した人がいるの。小林蓮。彼はあ  
なたと違ってお兄ちゃんを否定しなかったのよね」

あいつもあの男——シロウからカードデッキを 受け取ったんだ  
からあいつも願いがあんだよな。

「…俺にも願いがあんだ。ある少女が1年前から行方不明になっ  
て、その子を探すために俺はライダーになったんだ。彼女を、みほを  
探し出すまでは止めることは出来ないし負けられないんだ…」

「そつか…ごめんなさい」

そう言つてユイは消えてしまった。

気がついたら昼過ぎだった。いつもだったらテーブルにコーヒー  
と昼食が置いてあるが今としてはそれは過去の思い出だった。する  
と”あの音”が聞こえてきた。急いで着替えバイクを走らせる。場  
所はデパートの屋上だと思い、急いで向かったがさっきまで生きてい  
たであろう作業員は倒れていて息を引き取っていた。近くにあった  
窓に昨日の蜘蛛が映っていた。俺はデッキをその窓に突き出した。  
そして出てきたベルトを装着しデッキを装填する。そして仮面ライ  
ダーに変身する。そしてミラーワールドに入った。ライドシユー  
ターから降りモンスターを見た時、一瞬驚きで目を疑った。以前とは  
違い人型の上半身が上にくっついているようだった。左腰に下げて  
いる剣で斬りかかる。このままじゃダメージが与えづらかったから  
カードを読み込む。

《ソードベント》

槍を構えて改めて攻撃を繰り返す。ただ前回ののように簡単に勝て  
るかはわからない。

あの音を手掛かりにバイクを走らせると近所では大きいデパートにたどり着いた。バイクを駐車した時にサイドミラーにユイが映っていた。

「屋上に行つて。そこで蓮がモンスターと戦つてる」

急いで屋上に向かう途中、服屋の前で立ち止まった。女の子が泣いていたのだ。お母さんどこ？と言つて泣き続けていた。心の中でふつふつとある感情がわき上がってきた。そしてエレベーターに飛び乗り、屋上まで一直線。屋上では作業員が死んでいた。窓を見るとあの騎士が蜘蛛と戦っていた。

「ユイ…俺は戦う。自分の願いのため、君の願いのため、俺はライダーになる。ただ前と同じ状態だと…」

「デツキから一枚引いて、そのカードをあの赤い龍に向けて掲げてみて」

言われるがままにカードを引く。そしてユイが指差した方を見ると向かいのビルの窓ガラスから赤い龍がいつでも俺を食えるように狙いを定めていた。あいつに向けてカードを掲げる。すると窓から龍が飛んできて、カードに吸い込まれていった。

真つ暗な世界の中、赤い龍が俺の周りを飛び俺の体に巻きついた。すると姿が昨日と同じになり赤く色が変化した。カードデツキも金色の紋章が現れた。

気がつくとミラーワールドの中で立っていた。手には赤い龍が描かれたカードを持っていた。そして目の前にいたユイが言った。

「仮面ライダー龍騎、あなたもまたライダーとして戦うのね…」

ダークウイングを背中に装着して飛行しているところを糸で捕らえられ地面に激しく落下した。蜘蛛も地面に着地し針を飛ばして貫こうとした。もうだめなのか？まだ何かあるはずだ。打開策を考えなくても何も出てこない。そんな時視界の外から出てきたのは赤いライダーだった。蹴りで針を払つて蜘蛛と向き合う。まさかこいつは…

間一髪だった。あと10秒遅かったら蓮は串刺しになっていた。デッキから1枚のカードを引き左腕に装備されているバイザーで読み込む。

《ソードベント》

空から降ってきた剣を掴み、蜘蛛に突っ込んでいく。絶え間無く発射される針を弾きながら走り、高く飛び上がった剣を振り下ろした。そしてもう1枚カードを読み込む。

《ファイナルベント》

龍と共に高く飛び上がり、空中で体をくねらせる。龍が吐いた炎を足にまといキックを叩き込む。巨大な蜘蛛でも大きく後方に吹き飛ばし爆散した。そして出てきた光の球体を龍は食べて行ってしまった。

「お前、あいつと契約したのか？」

「ああ、俺は戦う。最後の1人にもなるし、シロウも止める」

「厄介なやつだ。先に倒したほうがいいかもな…」

蓮がそう呟いた瞬間いきなり切りかかってきた。そして、俺のライダーバトルは始まった。戦わなければ生き残れないー

## 6話

突然の蓮の攻撃を紙一重で躲す。

「あんた、まだやるのか。さっきの蜘蛛との戦いでダメージを負っただろ」

弱ったライダーと戦うのは外道だと思い、一応忠告をする。

「ふん。昨日までなにもできなかったあんちゃんがかけるとおもつてんのか？」

すると思いつき押し寄せられバランスを崩す。その隙を突かれ斬撃を受けたしまった。火花を散らしながら。尻餅をついて後ずさりしているところある異変に気付いた。蓮の手が光の粒子となって空中に吹き出していた。

「ちっ。時間切れか…お前に話がある。付き合え」

そう言つてすぐにミラーワールド から出て行った。選択権はないようだ。

デパート内のカフェ。蓮と向かい合うような席でコーヒーを飲んでいた。

「お前、あの赤い龍と契約したのか。まさか食べられないようにするためだけでライダーになったわけじゃないよな？」

「俺は自分の願いを叶えるため、それとユイのお兄さん——シロウを止めるために戦う。だからライダーバトルにも参加する」

カップを置いてなるべく声を押し殺すように言った。

「そうか…お前にもユイは話しかけたんだな」

「そういうあんたも知ってたんだろ。ユイやシロウのこと。なのに何もしないんだな、あんた」

蓮はこの言葉が気に入らなかったのかこっちを睨んできた。

「現時点で俺にできることはない。それにライダーバトルを勝ち抜けば自分の願いが叶うんだからな。こんな面白い話があるんだったら乗らないわけにはいかないだろ」

蓮の言葉に何も言い返せなかった。自分もそうだったからだ。み

ほを見つけないが為に他のライダーを倒そうと決心したから。  
「話は終わりだ、帰っていいぞ。今日は俺のおごりだから安心しろ」

家に帰る途中、頭にあの音が聞こえて来た。周りに人がいないのを確認してから近くにあった窓ガラスにデツキを構える。ベルトを着する。

「変身!!」

デツキをベルトに装填して龍騎に変身する。そしてミラーワールドに入り、ライドシューターに乗ってモンスターの元へと急ぐ。

たどり着いたところにはカニのようなモンスターがいた。

《ソードベント》

剣を召喚し、カニと戦う。両腕のハサミを剣で防ぎながら斬撃を与えていく。するとあたりにライドシューターの走行音が響き、目の前で停止した。そこからメタリックオレンジ色のライダーが降りてきてこつちを見つめてくる。仮面越したが強い視線を感じる。そこでカニが襲ってきて再び応戦すると、新たなライダーも攻撃してきた。その時点で気がついた。

「このモンスターはお前の契約したやつか!」

考えてみればモンスターと色が同じだった。ライダーは左腕に装着してあるハサミで攻撃してくる。剣で防ぎながら隙を伺うが、モンスターとの連携攻撃により押しされ吹き飛ばされてしまった。距離が取れたので1枚のカードを読み込む。

《ストライクベント》

契約モンスター——ドラグレッツダーの頭部にそっくりなドラゴクローを右腕に装着する。そして火炎弾を放つ。カニのライダーはガードベントで召喚したシールドで防いだが後ろに大きく吹き飛ばされ、そのまま逃げてしまった。

## 7話

危なかった。ガードしないであの攻撃をくらっていたら立ち上がれなかっただろう。あのライダーの声……まさか？

結局あのライダーが何なのかわからなかったが、こうして改めてライダーと戦うとなるとためらいが生じてしまう。するとニュースで連続失踪事件の特集をしていた。いつかミラーワールドのことが報道されるのも遅くはないのかもしれない、そんなことを思っていたら気になることをキャスターが喋っていた。

「ここ数日間で行方不明になった人たちはアンティークショップのムービー付近で目撃されたと警察が……」

何か手がかりがあるかもしれない。とりあえず行ってみよう。

「で？お前は何でここにいるんだ？」

「俺も連続失踪事件を追ってるんだ。もしかしたらモンスターの仕業かもしれないだろ。てか、お前は何でここに来たんだよ」

ムービーに到着したら先客——蓮がいた。そして健斗もその場にあった。

「どうしてここに？」

健斗もこのアンティークショップに失踪した人たちの手がかりがあると思っただけらしい。

「そしてここに来てみたらこの小林君が入ろうとしていたから呼び止めたんだ。よし、慎一も来たことだし、それじゃあ中に入ろう」

お店の中は荒れ放題だった。品物であろう椅子やタンスは倒れ、辺りに転がっていた。しかも埃だらけで蜘蛛の巣も天井に出来ていた。失踪した人たちはこんなところに来て一体何をしていたのか？そんな疑問が脳裏をよぎった。すると頭の中に音が響く。周りを見ると割れた鏡の破片からあのカニのモンスターがこちらを睨んでいた。返信しようとしたがここには健斗がいることを思い出し、健斗を先に避難させようとしたがその必要はなかった。

健斗はいなくなっていた。

「ぎっぎのモンスター、もしかしたらあの竹賀谷健斗って言う刑事…  
あいつの契約モンスターなのかもな」

店から出て、そんなことを蓮が切り出してきた。

「そんなわけないだろ。あいつがライダーなんて……」

「この店に入るとき、あいつは『慎一も来たことだし』と言った。おかしくないか？お前はあいつに呼ばれたのか？どうせお前のことだろ、今朝のニュースを見てきたんだろ。あいつはお前が来るのをわかってたんだよ。そして中に入ったらモンスターが現れ、あいつは消えた。もしかしたらあいつはどこかでお前がライダーだって知ったのかもな、そして潰そうとしたのかも」

あくあ、バレちゃったか。あの2人もそこまで馬鹿じゃないってことか。

「健斗!!」

大声で呼ばれて振り返ると慎一と小林君がいた。彼らの表情を見ると俺のことも勘付いているようだ。

「健斗、お前があこのライダーだったのか……」

「ああ、気付くのが遅いね、慎一。僕は君と戦った後すぐに気づいたよ」

あの赤いライダーが慎一だってね。

「邪魔だったから消そうとしたんだ。きつとあの店で待ってれば来ると思ってね。まさか一般人が来るとは思わなかったけど」

「残念だったな。俺もライダーだ」

そう言って小林君はデツキをポッケから出した。こいつもライダーだったのか。

「せっかくライダーが集まったんだ。ライダーバトルを始めよう」

ふと思いついたことを提案してみた。意外と小林君は乗り気なの

か顔から笑みが浮かんでいた。ただ慎一は乗ってこなかった。

「じゃあ俺と小林君のタイムマンで」

そう言った直後、俺と小林君は近くにあった窓ガラスまで走る。そしてお互いにデツキを突き出し、ベルトを装着、デツキを装填してライダーへと姿を変えた。

ミラーワールドの中に入ったらすぐにバトルが始まった。今まで契約モンスターに人間を食べさせて強化してきたおかげで俺自身の戦闘力も上がっていた。小林君を圧倒し、有利に戦いを進めていた。

《ソードベント》

《ストライクベント》

互いに武器を召喚し、ぶつけ合う事でバトルは激しさを増した。ただこの一瞬が最高だった。

「はは…はははっ！」

ほとんどの攻撃が通用しなかった。どんなに攻撃しても相手を怯ませられなかった。一体何をしたらこんな強くなるのか…この一瞬の隙を突かれ、吹き飛ばされてしまった。疲労に苦しんでいると、首を切り落とそうとハサミで狙ってきた。それを槍で必死に抑えるが力負けしていた。急にあの刑事は吹き飛んだ。奴を吹き飛ばしたのは杉山だった。

「健斗…お前は俺が止める！」

「俺の邪魔をするな!!」

健斗の猛攻を防ぎきれずダメージを受けるがこつちをやられっぱなしは気に入らない。隙を見て反撃をする。腹に拳を打ち込み崩れたところに蹴りを入れた。

「俺は…頂点に立つ。ライダーの…頂点に…」

「そのために何の関係もない人たちが死んでいったんだぞ！」

「あんな奴ら死んで当然だ!!俺の邪魔ばかりしやがったんだ!あいつ



らが悪いんだ……俺は悪くない!!」

「健斗おー!!」

《ファイナルベント》

空高く飛び上がり、空中で回転しながらドラグレッダーの炎に包まれたキツクを打ち込んだ。後ろに大きき飛ばされた健斗は大爆発した。炎の中、人影が1人見えた。健斗はまだ生きていた。

「俺は死なない……俺は……不死身だー!!」

健斗の叫び声があたりに響き渡る。直後に健斗のデツキが碎け落ちた。すると健斗の体は蒸発を始めた。

「まだだ、俺はまだ戦える!!」

すると健斗の背後にカニのモンスターが現れ、健斗に食らいついた。断末魔の叫びを響かせながらモンスターに食われていく健斗。とうとう変身解除して人間へと戻った。だがモンスターの食事は止まらず、健斗の碎けたデツキだけが残されていた。

《ファイナルベント》

蓮のファイナルベントがカニのモンスターを貫き、光る球体は蓮の契約モンスターが食べていった。

ミラーワールドから出た後、蓮から話しかけてきた。

「これでもお前は戦えるのか?これでも人を殺せるのか?」

健斗の死は俺の心に暗黒をもたらした。

でも……

「でも俺は戦わなくちゃいけないんだ。俺が健斗を殺したのかもしれない。だとしてもここで、立ち止まるわけにはいかないんだ」

「そうか……なあ、知ってるか?契約モンスターは人間を食べるか、モンスターを食べると強くなるんだ。だから竹賀谷は人間を食べさせたんだ。まあ、結果として自分が食べられる結果となったけどな」

蓮の話しは続いていたが、その場から立ち去った。また明日も明後日も、戦いは続くのか……

真夜中、ある一匹のモンスターが食事をしていた。すると暗闇の中から緑のライダーがモンスターに向かっていく、腰のホルダーに銃をぶら下げて……

## 8話

この日、慎一はあるビルに来ていた。数日前からネットである都市伝説が噂となっていた。『恐怖!!人喰いエレベーター!!』と書かれたタイトルが物語るようにビルの中のエレベーターに乗ると食べられるてしまうらしい。食べられる。この言葉を見た慎一はモンスターがらみの事件だと予想して調査に身を乗り出した。警備員から許可をもらい、中に入ると違和感のある行動が見られた。ほとんどの人がエレベーターには乗り込まず、階段を使っていたのだ。でも全ての人というわけでもなく、少数の人はエレベーターを使っていた。

「とりあえず乗ってみるか」

関係者と思わしき5人が乗り込んだエレベーターに乗り込んだ。

結局慎一以外が降りてもなにも起こらなかった。やっぱりデマだったのか……がっかりしたような嬉しいような複雑な気持ちのまま1階に戻るためボタンを押す。エレベーターが1階に向かってる最中あの音が響いた。後ろを向くと壁に大きな鏡が取り付けられていた。気づかなかった自分がすっかりした時にはもう遅かった。ミラーワールドから鏡ごしに獲物に狙いを定めるようにこちらを見る。

「やっぱりいたのか!」

急いでデツキを取り出し鏡に向かって突き出し、出現したベルトを装着する。右腕を左上へ斜めに突き出し腹から叫ぶ。

「変身!!」

デツキをベルトに装填し、仮面ライダー龍騎に変身した。

「シヤッ!!」

目の前の鏡に向かって走りだしミラーワールドの中に突入する。

ライドシューターから降り、都市伝説の正体——ゼブラスカルと改めて対面する。

《ソードベント》

ドラグセイバーを召喚し横一文字に切りつけるが、ゼブラスカルの体が縦にバネのように伸びたせいで斬撃が効かなかった。そして体が元に戻るとドロップキックを繰り出し、大きく吹き飛ばされてしまった。壁に激突し痛みにうずくまると、バネをいかした大ジャンプでビルの上上に飛んで行ってしまった。

「嘘だろ、まじかよ!!」

ゼブラスカルほどの大ジャンプができない龍騎はビルの外階段を全速力で駆け上がったいく。

それを地上で眺めているミラーモンスターがいた。ゼブラスカル——アイアン。同じ種族のブロンズと同じビルを狩場としていたのだ。すると後ろからライドシューターが走ってきた。そこから降りたのは緑の仮面ライダー——ゾルダ。右腰にぶら下げているマグナバイザーで狙い撃ちするがアイアンもブロンズ同様に縦に伸びて銃弾を避けてしまった。

「避けれるのか……なら大きいのはどうだ?」

デッキから一枚のカードを抜き、バイザーで読み込む。

《シュートベント》

ゾルダ自身よりも大きなサイズの大砲を召喚し両手で持ち、構える。そしてアイアンに照準を定め腰を落として発車する。大きすぎる反動により後ろに引き下がるが、アイアンはバネのように縦に伸びても避けきれず大爆散した。

「ふうー。案外大したことないんだな」

そう呟いたゾルダは自身が入り込んだ鏡に向かって立ち去っていった——

なんとか屋上に上がることができた龍騎。そこにはまだブロンズがいた。

《ストライクベント》

ドラグレッダーの頭部にそっくりなドラグクローを召喚しドラグクローファイヤーを放つ……が再びバネのように縦に伸び、勢いを押

し殺してしまい致命的なダメージを与えることはできなかった。

「それなら!!」

《ファイナルベント》

ドラグレッダーとともに空中に飛び上がり、回転しながら、ドラグレッダーの吐いた炎を纏ったキックをブロンズのボディーに叩き込んだ。このドラゴンライダーキックの勢いは殺せずブロンズも大爆散した。

都市伝説の正体を倒した慎一はビルから出て駐車場に向かおうとしていた。その途中で同世代と思われる青年とすれ違った。慎一はまだ、彼が緑のカードデツキを持つライダーだとは知らない……

## 9話

早朝、小林蓮がアルバイトしているカフェ——花鶏に1人の客が来ていた。ただホットコーヒーを飲みながらため息をついていて、どこか疲れた様子だった。

「なんでも願いを叶える力があつたらどうしますか？」

唐突に話を振られた蓮は少し考えてから

「お客さんはどうするんですか？何か叶えたい願いなんかあるんですか？」

と言った。すると客も少し黙り込んでからポツリポツリと話し出した。

「実は歳の離れた妹がいるんですけど、今病気にかかっちゃって、どうも薬もまだ出来ていないみたいで……もし妹を助けることができるとしたら俺はなんだって出来ますね」

その客は苦笑し、会計を済ませた後

「お兄さん、いつか聞かせてくださいね。お兄さんの叶えたい願いを……」

と言つて店を出た。

杉山はあるゲーム制作会社へと向かっていた。そこに勤めている人が大洗女子の生徒でみほを知っているらしいからだ。

「こ、こんにちは……」

その会社は都会の大きなビルにあり、中も思っていたよりも綺麗だった。そして何よりお互いのことをあだ名で呼び合っていた。独特な雰囲気立ち込めている社内はどこか居心地が少しだけ悪かった。

元大洗女子の猫田さんはディレクターとして来年発売するゲームを担当していた。

「あの……お話というのは……」

「西住みほさんについてお話を伺いたいのですが……」

すると少し申し訳そうな顔をして言った。

「ごめんなさい、私あまり西住さんとはお話したことがなくて……戦車道以外ではそれほど関わりを持っていなかったのだから」

「そうでしたか……どうもすみません。お時間を取らせてしまって」

しかたなく帰ろうとしたら、

「ただ、寝不足気味ってよく言っていましたよ。悪夢をよくみるとかなんとか……」

ビルから出たら共鳴音が聞こえ、杉山は路地裏へと走る。周りに人がいないことを確認し、龍騎へと変身する。

「変身!!」

龍騎はミラーモンスター——バクラーケンに掴みかかると煙幕放たれ、視界が奪われてしまう。その隙に攻撃を受けてしまう。だがその攻撃はバクラーケンのものではなかった。

「何面白そうなことしてんだよ?」

そう言いながら右手に取り付けられた角で突いてくる仮面ライダーガイによるものだった。

「お前もライダーか!?こんな時に!!」

右手のメタルホーンの攻撃をもろに食らって吹き飛ばされた龍騎、その間に逃げようとするバクラーケンだったが……

「逃げんなよ」

《ストライクベント》

ストライクベントで呼び出したメタルガラスで阻止され頭の角でダメージを負ってしまった。

「これでゲームオーバーだ」

《ファイナルベント》

ガイはメタルガラスの肩に乗り、高速で標的に突進し貫くヘビープレッシャーでバクラーケンは大爆散した。

「次はお前だ……」

そう言いガイは龍騎に迫っていった……

## 10話

「ぐはあ!!」

ガイのメタルホーンの突きをくらい、龍騎は吹き飛ばされた。

《ガードベント》

ドラグレッツダーの腹部を横した盾のドラグシールドを装備したがガイに押されていった。

「くっ……こうなったら……!」

ドラグレッツダーを召喚してガイを牽制しようとするがガイにその隙を突かれ、激しい攻撃をもちろに受けてしまう。ついにあまりの激痛や疲労により龍騎は意識を失ってしまった――

気がついたら全身から光の粒子が吹き出っていて、自分が長い時間ミラーワールドにいたことに気がついた。

「どれくらい気を失ってたんだよ、俺……」

俺を起こすために努力してくれたようだ。ただこのままだと本当に消滅してしまうから傷ついた体を引きずって現実世界に戻る。

目が覚めると自分んちとは違う天井が見えた。

だんだん頭が回ってきて、周りを見ると自分がベッドに寝かされていた。体には包帯が巻かれているところもあり、誰かがやってくれたみたいだ。するとお茶が注がれている湯呑みを持って女性がやってきた。

「気がついたみたいだな、エルヴィンが倒れている君を見つけてくれたんだ」

「ありがとうございます……もう大丈夫なので」

そう言っただけ帰ろうとした。あまり長い間家を空けたくはなかったし、まだあつて話さなくちゃいけない人がいるし。

「まだ休んでいいぞ。それにしっかりお礼を言った方がいいぞ。あと今日の晩ご飯はすき焼きだから食べて行ってくれ」

結局説得されて帰るのをやめた。決してすき焼きにつられたわけ



じゃない。

「あの……お名前は？」

「私はカエサルだ！」

そう言っつて首に巻いてあつた赤いマフラーをなびかせた。

ガイがミラーワールドに入り込んだ時、目の前にいたのはナイトだった。ガイはあのライダーだと思つたが別のライダーだった為心底がっかりしていた。

「なんだよ、別のやつかよ。でもあんたは俺を楽しませてくれるよね？」

「お前と遊んでいる時間なんてない」

そう言っつている間にガイは突っ込んできた。

《ソードベント》

《ストライクベント》

互いの武器をぶつけ、火花を散らしながら相手の首を討ち取ろうとする。ナイトはメタルホーンの突きをひらりとかわし、ガイはナイトのウイングランサーをメタルホーンで弾く。すると唐突にガイの方からナイトに話しかけた。

「今俺は赤いライダーのカードを持つてる。アドベントのカードだ。俺と協力してそいつから潰さないか？協力プレイだよ」

そう言っつてカードを見せてきた。ナイトはすぐに龍騎のカードだとわかった。

《ナスティベント》

ダークウイングが飛んできて超音波を発し、ガイはあまりの苦痛でカードを落とし、耳を抑える。

「お前……」

「悪いが興味ない」

「あんたも願いがあるんでしょ、叶えたいさ……まさか人殺しができないの？だったらライダーになつても意味ないじゃん」

ガイを無視してカードを拾い、走つてミラーワールドから出た。

深夜のとある広場。

仮面ライダーライアはファイナルベントをくらい、倒れていた。

「俺は……まだ……死にたくない……」

日本一のホストとなつて色んな女と遊びたかった、その願いは今まさに消えようとしていた。

そんなライアを見下ろす紫のライダーがいた。その名は仮面ライダー王蛇。ライアがついさっきまでいた場所を見ながらポツリと呟く。

「前回よりも手応えないんだな」

## 11話

朝――

カエサルさん、エルヴィンさん、あと左衛門佐さんとおりようさんの5人で焼き焼きを食べ、知らない間に俺は寝ていて、気がついたら朝だった。まだ寝ぼけている頭を再起動させようとしていると台所あたりから声が聞こえた。

「起きたか、そろそろ朝ごはんが出来るぞ。ご飯の前にシャワーでも浴びてくるか？」

お言葉に甘えてシャワーを浴び、頭も覚めてきたが重大なことに気がついた。

「あつ、着替えがない……」

浴室でどうしようかと考えているとドアの外側から左衛門佐さんから声をかけられた。

「今エルヴィンの軍服持ってくるから」

「おおー」

「似合ってるな……」

「かつこいいぜよ」

「眼帯もつけてみないか！」

素肌の上から軍用ジャケットを羽織り、さらにドイツ陸軍を模したような軍帽を被った姿を見てみんな盛り上がり上がっていた。これで帰るのかな……

「あつ、あんたは」

「お前か……つて、なんだその格好」

駅に向かう途中で蓮に会った。

「まあ色々会ったんだよ」

この説明に納得しなかったのか――するはずもないけど――少し不機嫌な顔をしたあと何か思い出したようにポケットの中を探り一枚のカードを渡してきた。ドラグレッダーが描かれた俺のアドベントのカードだった。

「これは俺のカード……なんでお前が持ってたんだ？」

「お前がやられたやつからもらったんだ」

あの銀色のライダーだ。

「なんであいつは蓮に渡したんだ？」

思ったことをそのまま言葉にして聞く。

「色々会ったんだよ」

俺がついさつき言った言葉を同じように返された。

蓮と別れた後は案の定、軍服姿で電車に乗ったからか、女子高生にコソコソ言われ、しまいには警官に職質までされたが、なんとか家に到着した。明日は私服で返しに行こう。あの4人の歴女たちの顔を思い出すと付いてくるように昨日の夜の話も思い出した。

——西住隊長、全国大会のあとから時々戦車道の練習に来なくなつたよ。連絡もつかなかったな。そう、いつも電波が通じなくて繋がらないぜよ。なのに次の日には普段通りに学校来ていて、話を聞いても濁されたよね。

全国大会までは学校にも練習にも来ていて、そのあとから来なくなった。全国大会の時に一体何があったんだろう……？

ベットに飛び込んで考えていたら寝てしまった。

日曜日。多くの人は仕事が休み。ただ中学生や高校生だと部活なのか体育着や練習着で歩いているのを見かけた。蓮は近くの公園に寄ると老夫婦がベンチに座って遊んでいる子供達を眺めていた。そんな老夫婦をまだ強い日差しから守るように桜の木が立っていた。

——桜が綺麗だね、蓮

久美の言葉が聞こえた気がして蓮は思わず振り返ったが彼女は今病室で寝ている。そのことを思い出し、鼻で笑ってしまった。情けないな、俺。その時、頭の中に共鳴音が聞こえ近くにあり、なおかつ周りに人がいない窓ガラスなどを探す。そしてデツキを構え……：ようとしたが動きが止まってしまった。青年に見られてしまったからだ。「へえー、あんたライダーなんだ。俺もそうなんだけど、とりあえず始

めようぜ」

そう言つて青年はデツキを構える。自分も遅れまいと改めてデツキを構え、ベルトを装着、デツキを装填して仮面ライダーナイトに変身する。青年はあの銀色のライダーに変身していた。

「あん時のやつだったんだ。じゃあちようどいいね」

直後、お互いにミラーワールドに突入した。

慎一は共鳴音を聞き、駐車場に停めてある車の窓ガラスにデツキを構えた。反対側にも人がやってきてデツキを構えた。

「あんたもライダーなのか？」

「そういうお前もライダーか」

ベルトにデツキを装填し、お互いにライダーに変身すると、反対側には緑色のライダー——仮面ライダーゾルダが立っていた。

「仮にやり合うとしても、モンスターを倒してからにしないか？」

自分でも情けないことを言つてるのはわかっているが、まずはモンスターを倒してこれから被害には遭うかもしれない人を救いたかった。

「……別にいいけど」

本当に約束を守るかはわからないが、とりあえずミラーワールドに入った。

南藤宏人は聞き慣れた音を聞いて、入り口を探すがガラスや鏡は依然と見つからない。仕方なく持ち歩いていたペットボトルの水をぶちまけて水たまりを作った。その水たまりに向かってデツキを突き出し、ベルトを装着、そしてデツキを装填して仮面ライダー王蛇に変身する。首を回してリラックスをし、水たまりを介してミラーワールドに入り込んだ。

今、ミラーワールドの中の同じ場所に5人のライダーが揃う——

## 仮面の裏側      side 杉山慎一

1人の少年が母親と思しき女性に叩かれていた。少年は泣いているが女性は叩くのをやめない。周りには誰もいない。この光景を俺は体験した。この少年は幼い頃の――俺だ。

急に目が覚め、少し息が荒く、鼓動が早いのに気づいた。時計はちようど深夜2時半頃を指した時だった。目が覚めたし、今寝るとまた悪夢を見てしまいそうなので緑茶を淹れ、少しずつ飲んで気を落ち着かせる。そして洗面所に行って顔に冷水を2、3度打ち付けるようにかける。目の前の鏡には見慣れた男がいる。自分のことを最もわかってくれて、いつでも会える、1番最初の友達がいる。

「あの時……俺は門限の7時を守らなくて叱られたんだ。門限を守らなかった俺が悪かったんだけど、母親には腕が腫れるまで叩かれたっただけ」

洗面器に寄っ掛かりながら鏡の向こうの自分に語りかける。友達がいなかった小学生時代からやっていることだ。嫌なことや母親のことを鏡の向こうの自分に話すことで少し気が楽になる。自分でもおかしいとは思ってるが。

「父さんは単身赴任で滅多に帰ってこないし、お正月やお盆の時も帰ってこないことがあったっけな。そうそう、先生は俺が虐待を受けているの知っているけど何もやってくれなかったんだぜ」

思わず鼻で笑う。誰も助けてくれなかったんだっけな、あの時。何度も死のうかと思っただけど、それでも今こうしていられるのはきつと生きたかったからなのかもしれない。

「結局母親に捨てられたんだっけ。小六の時。行くあてもなくただ歩いていったんだっけ、あの夜、あの田んぼの中のアゼ道を」

無理やり家から放り出され、ドアには鍵をかけられ、どうしようもないから歩き出したんだ……あてもないのに。

「そして気づいたらあの家に居たんだっけ。確か倒れていたところ

を拾われたんだ」

それまではまともなご飯ももらえなかった——朝食が水だけの時や夕食がない事もざらにあった——だからあの時食べたご飯の感動は今でも覚えてる。

「みほやまほちゃんと出会って初めて女子で本当の友達が出来たんだ。そして優しい母さんもいた」

その時に気づいたけどみほやまほちゃんと同じ小学校だったらしく、別のクラスのまほちゃん、一個下の学年のみほは俺を知っていた、いつもいじめられている人だって。

「事情を知った母さんはうちに来て母親と1時間以上話し合った。そして母親は逮捕されて、俺は母さんの養子として引き取られた。父さんは事情を知っていたが日本にいなかったんだ」

「小学校の方に母さんは俺が西住家の養子になったこと、それにいいめのことを伝えてくれて結局いじめていた奴らは転校したんだっただな。」

急に俺の名字が”西住”になってクラスの人たちはみんな驚いてたっけ。

「結局あの家族には3年半くらいお世話になったな。東京の高校への入学が決定して引越しの準備していたらみほたちがプレゼントくれたんだ。人からもらったものって捨てられないよな」

みほはボコっていうぬいぐるみ、まほちゃんは森鷗外の高瀬舟をくれた。まるで他人と喋ってるように独り言を話す自分が馬鹿みたいだ。

「高校からは1人暮らしをしていたけど、母さんが仕送りしてくれて、アルバイトをしてたけどそれのおかげで生活してた部分が大きかったし、本当に感謝だよな……」

でも秋くらいに父さんが帰ってきてそれからは2人暮らししていたから仕送りも止めてもらったんだな。竹賀谷 健斗と出会えたのは良かったけどやっぱりあの時の3人で遊んでいた時が一番楽しかった時期だと今でも思う。

今みほは何をしているんだろう？

そんな事を考えながら洗面所の鏡をまた覗くと相変わらず俺の顔が映っている。洗面所から離れベットに腰をかけるとだんだんとなくなってきた。もう寝ようと思い目を瞑る。

次の日、まほちゃんの電話で起こされた……



## 12話

ガイは全力を出していた。1度は邪魔をしてきたあいつだが、そいつと戦っている時が1番楽しかった。今までやってきたどんなゲームとも違う、もちろん野良モンスターを相手にするのも違う。

「やっぱりあんたサイコーだよ」

「あんたと戦っている時が1番充実してんだよ。仕事もクソ、上司もクソ、何もかもがクソだけど、あんたと戦っている時だけはそのクソなことを忘れていられる」

そんなことを言ったらあの赤いライダーが”飛んできた”。正確には”吹き飛ばされてきた”か。吹き飛ばされてきた方を見ると紫のライダーが走ってきていた。そのライダーは卓越した身のこなしでこっちの攻撃をかわし、殴りかかってくる。紺色のライダーも手が出ない様子だった。赤いやつはまだへたっていた。

いきなり突っ込んできた”あいつ”。経験者と思えないほどの動き。だが、あの赤色のやつに攻撃は集中していた。あとを追ってみると2人の他に、もう2人いた。ここで一気に4人減らせば……。そこまで考えたゾルダは1枚のカードを引き抜き、

《アドベント》

マグナバイザーにアドベントカードをベントインし、契約モンスター——マグナギガを召喚する。そして新たにカードをベントインする。

《ファイナルベント》

マグナバイザーをマグナギガの背面にセットし引き金を引くと、マグナギガの装甲が開き、ミサイル、レーザーなどが4人のライダーに向かって飛び出していく。それは4人だけでなく、周りの建物までも破壊した。

今日の前で起こっていることに龍騎は衝撃を隠せなかった。ガイは王蛇の盾にされ一身にファイナルベントを受け、まともに立つてられない様子だった。

「俺は…生きる…まだ、サイコーなゲームを作っただけ。あいつらを見返せるような…ゲームを…！」

「楽にしてやるよ」

《ファイナルベント》

王蛇は走り出して大きく飛び上がり、契約モンスターであるベノスネーカーが吐いた毒液を纏わせた足を上下に動かしながら連続で蹴りを叩き込んだ。壁まで蹴り飛ばされたガイは

壁にもたれかかり、大爆発した。煙が晴れてもガイの姿はない。

王蛇は龍騎の方を向いて指を指す。

「次はお前だ」

そう言っただけでゆっくり歩み寄ってくる。龍騎はなんとか立ち上がって駆け出し、殴りかかるが躲かれ、逆に殴られてしまう。ボディーパーンク、頭突き、回し蹴りと連続で攻撃を受ける。

「この野郎……」

《アドベント》

ドラグレッダーを呼び出し、反撃を試みる。ドラグレッダーが吐き出した火炎弾は周りを炎で包み、王蛇に隙を与えた。その好きに飛びかかり打撃を連続して打ち込む、だが倒れない。

「この前の”やつ”よりもやりがいがありそうだな、お前……」  
ソードベント

ほぼ同時にベントインし、互いの武器を召喚し、火花を散らしながらぶつけ合う。

「お前、さっき”この前の”って言ってたけどどういう意味だ？」

「言葉通りの意味さ。前回のライダーバトルの時の変身者とは違ってお前はよっぽどやりがいがある」

そこまで言っただけで腹部を蹴り飛ばし、間合いを空けてきた。

「あいつはあえてライダーを殺さないような戦い方をしていた。攻撃を躲しながら相手が疲れるのを待って隙を見て強攻撃。全くつまんねえ、でも俺はあいつに負けた。きつとあいつは今回のも参加してるはずだ。探し出して俺が潰してやる」

すると回れ右して立ち去っていった。

「それまでは他のやつを消していく。少しでも数を減らしたいからな」

そう言いながらどこかへと行ってしまった。結局残ったのは龍騎とナイト。2人は互いに向かい合い、しばらく見つめ合うが戦うことはせず、自分たちが入り口にした場所へと向かう。

## 仮面の裏側 Side 南藤駿介

南藤駿介は勝ち組だった。父親は大手IT企業の社長。母親は専業主婦として家事をしながら投資家として、600万は稼いでいた。そんな両親は駿介に甘く、駿介が欲しがるものはなんでも与え、したい事も全てやらせていた。そろばん塾に通い、数ヶ月で辞めてピアノを習い始めた事もあった。それも長続きしなかったが。

そんな人生を歩みながら高校卒業を控えたある日、駿介の母親はとうとう大損した。それだけならまだしも、さらに父親の会社も倒産してしまった。多額の借金を背負い、追い詰められた一家は今までの生活を捨て、質素な生活を始めた。それに一番耐えられなかったのは駿介自身だった。

駿介にとって今までとは180。違う生活は不便で窮屈なものだった。欲しいものは手に入らず、したい事も出来ない。友達とご飯を食べに行く事だって出来なかった。そしてお金がないせいで志望校への入学も叶わぬ夢となってしまった。

成人し、1人暮らしを始めた駿介はフリーターとして生活しながらゲームをしていた。ゲームをしている間は悩みや苦しみを全部忘れることができた。話題の新作から懐かしいものまでプレイしてだが、ゲームが増えるのに比例してバイトの数も日に日に増えていった。次第に駿介はお金を稼ぎながらゲームをする方法を考え、出てきた案はゲームを開発する会社に勤めることだった。それならゲームのテストプレイも出来るし、自分の好きなゲームを作ることも出来る、そしてお金も稼げる、と考え早速会社を探し始めた。

3年後、シロウは駿介にカードデッキを差し出し、これを使って生き残ればなんでも1つ願いが叶うと言い、渡してきた。駿介は就職してからゲームを世に出してきたが結果に満足できるものじゃなく、またいまいちヒットせず、同僚の猫田やその仲間たち——確かびよんとかももがーとか言ってた——に抜かされかけていた。サイコーに

面白いゲームを作りたい、そう願ひ、デツキを受け取った。

駿介はデツキを受け取ってから毎日のように変身して、ミラーワールドに行った。ライダーには出会うことはなく、毎回モンスターを倒して戻ってくるだけだった。ただ死ぬかもしれないというスリルは駿介には新鮮でサイコーに面白かった。ある意味、望んでいたものが手に入った。それと同時に、ライダー同士の殺し合いならもっと面白いかもしれないと思うと、ワクワクした。でもいくら待ってもライダーは現れず、ただ時間が過ぎていった。本当にライダーバトルをやっているのか、実はやっていなくて俺しかライダーがいないんじゃないのか。そんなことを考えていたらあの共鳴音が頭に響く。近くの窓ガラスから様子を伺うと龍騎とバクラーケンが戦っていた。駿介は迷わず変身してミラーワールドに入ってしまった――

## 13話

花鶏にcloseの看板が掛けられていたが店内には蓮、緑のライダー——ゾルダになった奥本拓矢、あの紫のライダー——王蛇の梅屋宏人、そして俺——杉山慎一の4人が居た。お互いが顔を向かい合うように円形のテーブルを囲んでただ黙って座っている。ここに集まっただけでこの調子だった。

「おい、あんたこの間前回のライダーバトルって言うたけど、今回の初めてじゃないってことなのか？」

拓矢が話を切り出した。だが聞かれた宏人は目の前に置かれていくカップを掴み、勢いよく中のコーヒーを飲み干して、少しめんどくさそうにして答えた。

「何度も言わせるなよ。確かにお前が言うようにこれは2回目だ」

「そんなことより、本当に最後の1人になれば願いが叶うのか？」

今度は蓮が問う。

「俺は途中で脱落した。デッキを破壊されてな。だから本当に叶うのかは知らん。ただ、願いが叶ってない奴を1人知ってるぞ」

みんなが宏人の方を見つめる。

「シロウだ。おそらくあいつは自分の欲しいものを手に入れるためにこのライダーバトルを始めた。ただ前回のやつじゃ欲しかったものが手に入らなかったからまた始めた、俺はそう考えてる」

その話が本当だったら、自分の欲しいもののためにいろんな人に殺し合いをさせているのか？ 一体何を欲しがってるのか逆に気になっってくる。

「利用されてるだけってことかよ、じゃあ願いが叶うって言うのも嘘なのかよ！」

拓矢がキレるのもわかる。もしかしたらこれがみほを見つける最後のチャンスかも知れない。なのに実は初めからチャンスなんかありませんでした、なんて納得できない。宏人はどうなんだ？ 願いが叶わないかもしれないのにサツパリしてる。願いが叶わなくてもいいのか？

「あんたはどんな願いを叶えたいんだ？このライダーバトルに勝つて」

「俺は、俺を脱落させたあいつを倒せればそれでいい」

「もし参加していなかったら願いを叶える力を使うんだろ？だったら」

「やつはいる。絶対に」

自信があるようだ。まるで参加していることを知ってるようだ。

「そういえばユイはどうした？」

蓮のその一言で思い出した。他の2人もそのようだった。元々この集会を計画したのはユイだった。ユイが俺たちにミラーワールドから誘ってきたのだ。

ちょうどその時、あの共鳴音がした。窓ガラスを覗くとユイがミラーモンスターに襲われていた。なんとか逃げているが追いつかれそうだった。

「ユイを助けないとー」

急いでデツキを取り出してガラスにかざす。すると蓮、拓矢も自分のデツキを取り出した。

「蓮……」

「勘違いするな、モンスターを倒して、ダークウイングを強化したいだけだ」

「俺はこいつと違ってユイって人を助けたいからだけだな」

拓矢はそう言って蓮のことを指さした。蓮は拓矢をひと睨みしてから変身した。俺と拓矢も変身して、3人でミラーワールドの中に入る。

どれくらいの間走っただろう。そんな疑問がふと思い浮かんだが、答えを出すことはできない。もうだめだ。足が重い。追いつかれる。「だあー!!」

自分じゃない誰かの叫び声が聞こえ、思わず足を止めて振り返る。目の前で、追いかけていたモンスターと3人の仮面ライダーが戦っていた。

「慎一？」

思い当たる名前を呼ぶと、赤いライダーが振り返って名前を呼んだ。やっぱり彼だった。

「ユイ、大丈夫？ 怪我はなさそうだけど……」

「ありがとう、あなたが来なかつたら私……」

「杉山！ こつちを手伝え！」

紺のライダーが慎一を呼ぶ。2人がかりでも苦戦してるようだ。

「隠れてて」

そう言うときさま2人のところに加わり、モンスターを押し切った。

「いけるー！」

思わず声が出てしまった。あと少しで倒せそうだが……

突如、白いライダーと黒いライダーが現れ3人を弾き飛ばした。よく見ると黒いライダーはあのカードデッキで変身していなかった。白いライダーは両腕の巨大な爪で引つ掻き、黒いライダーはカードを引き、読み込む。

《アクセルベント》

高速で移動して3人に連続して斬撃を加える。皆疲弊してしまい、地面についてしまった。白いライダーが慎一に近づき、最後の一撃を与えようとしたその時、黒いライダーから光の粒子が飛んだ。他のライダーはまだ大丈夫なのに彼？ 彼女？ だけ時間切れが近づいているのはきつとデッキが違うからだろう。

「ちっ、仕方がない。一度戻ろう」

「はい」

黒と白のライダーは共に帰ってしまった。とりあえず一安心したが慎一は飛び起き、追いかけていった。そして襲撃したライダーたちと同じ鏡に入っていた。

ミラーワールドから戻ってきたら目の前の2人は変身を解除した。2人とも大学生くらいで同い年かと思った。こつちも変身を解除し



てとりあえず敵意が無いことだけは伝わるようにした。

「ここまで追ってきて、お前は何が目的だ」

「それはこっちのセリフだ！ユイを襲ったのはあんたらのモンスターだろー」

「そうだ。彼女を狙ったモンスターは俺のモンスターだ」

「やっぱりこいつだ。ただ何が目的なんだ？ただ勢いに任せてもきつと喋らない。少し落ち着こう。」

「どうしてユイを襲った」

「そのユイって呼んでいる少女、彼女がミラーワールドを閉じる鍵なんだ」

「ミラーワールドを……閉じる？」

「そんなバカな話があるか」

横から入ってきたのは蓮だった。

「彼女を消せばミラーワールドを閉じることができる。ミラーワールドを閉じれば人がモンスターに襲われることも無くなる。君たちのようなライダーが殺し合ってる間にモンスターに喰われている人がいるんだぞ。君たちは自分の欲望の為にしか動いてない……まるであのモンスター共と同じだ。だから僕たちが人々を救う、そして僕は英雄になる」

「ミラーワールドを閉じれば助かる人がいる、でもみほを見つけるには……。板挟みで心が苦しくなってくる。俺はどうすればいいんだよ、なあ。」